

白山麓住民の樹木利用について——主として民家・民具及び衣食の場合——

千葉 徳 爾 明治大学文学部地理学研究室
叶 内 敦 子 明治大学文学部地理学研究室

UTILIZATION OF TREES IN HAKUSAN AREA ——MAINLY FOR HOUSE AND TOOL MAKING AND FOR WEAR AND FOOD——

Tokuji CHIBA and Atsuko KANAUCHI, *Department of Geography, Faculty of
Literature, Meiji University*

はじめに

白山麓における自然の諸作用ならびに天然物などについての研究は、そのものや作用それ自体については、これまでの本センターの研究報告をはじめ各方面の成果がある¹⁾。しかしながら、それら單獨ではなく、それらと地域住民とのかかわりについては、さほど多くの研究が行われてはいないようである。本稿の題名とした樹木の利用についても、住宅の建築、日常の自家用生活用具（いわゆる民具）および衣料・食料などに供する樹木の部分に関していうならば、そのような行為が日本民族の衣食住生活の通例であるという、漠然とした理解のままで処理されてきたといえる（水津，1970ほか）。しかしながら、一步立入って、どのような種類の樹木がどのような用途に利用されているのか、さらに、そのような用途はその樹木のどのような性質が注目されて利用されているのか、といった樹木のもつ特性についての住民の関心（いわゆる民俗知識）についての考察は、これまで研究対象としてさほど注意されてはいない²⁾。本県関係では僅かに今村充夫の調査がある³⁾のみで、全国的にもこの点に注目する調査は稀であるといえる。

しかしながら、本研究のような試みは、当自然保護センターのような、人類の無秩序な活動から「自然」ことに生物を保護しようという目的での対策を研究する場合には、それら「自然」の中の、主として何が人類活動の対象とされているのか、人類におけるその対象の選択基準は何かといった問題は、緊急の課題となり得ると考える。この意味において、著者らは主として植物ことに樹木の材質に注目する住民の利用行動の過去の姿を調査することを考えた。ことに白山麓の地域特性としての雪とのかかわりを重視すること、したがって、それとかわる民家・民具ならびに衣食を中心とする方針を立て、それらを重点とする資料調査を試みた。

研究手段としては専ら古い民家・民具を収蔵する歴史・民俗関係の博物館、資料館⁴⁾についてその陳列あるいは蒐蔵物を観察し、傍ら現存する民家・民具の使用中の品をも観察して使用者から話をきくこととした。この際なるべく建設年代、製作時期の古いものを中心としたが、その時代としては幕末から大正年間というかなり幅のある時期にわたっている。しかしながら、この時期はまだ交通路や運搬機関が当地域では甚だ不十分であって、利用すべき樹木は住居地からさほど遠距離のものは使用しなかった。したがって、性質が住民にとって明かでない材料は利用されていないと考えられる。このほか、住民からのききとりや博物館・資料館の学芸員・係員、郷土研究者などの意見を求め不備を補うこととした。

研究分担としては、民家・民具類を主として千葉、衣料・食料関係を主として叶内が受け持ち、明治大学々生金子広幸氏が計測・描図を行った。また、自然保護センター岩田憲二氏には準備依頼、案内などの労をとっていただき、橋礼吉、伊藤常次郎両氏には種々解説や文献指示⁵⁾を賜った。この場をかりて厚く謝意を表する。

なお、本稿は調査の一端をどのような形でまとめるのが適当か不明のまま、試案として発表するもので完成は他日を期したい。

注

- 1) これについては石川県白山自然保護センター編：石川県白山自然保護センター研究報告第1集 (1975)～第13集 (1986) を参照。
- 2) 小原二郎：木の文化 (1984)、遠山富太郎：スギの来た道 (1976) など管見に入ったものは木材研究者にみられる。
- 3) 国立民族学博物館情報管理施設編：国立民族学博物館国内資料調査委員調査報告集5 (1984) に収められた民具等標本資料の所在に関する情報のうち石川県の部がそれである。その他に鳥取県・岡山県の報告中に一部みられるにすぎない。
- 4) 調査したのは石川県立歴史博物館、小松市立博物館、加賀市立歴史民俗資料館、白山ろく民俗資料館、桑島の里、鳥越村歴史資料館である。その他江戸村等については今回の調査が及ばなかった。
- 5) 伊藤常次郎氏の談話を集録した朝日新聞金沢支局編：常次郎氏の春夏秋冬 (1986) はとくに参考となった。

材 の 取 得

この地域において、住民が利用する樹木はほとんど居住地区の近在、ほぼ3～4km内外の距離で採取したものであった。これは当時の道路ならびに輸送手段が不備であったことによる（白峰村史編集委員会，1961；尾口村史編集専門委員会，1981）。したがって樹種については、居住地に近い森林の植生によってほとんど決定されるといってよく、それらの樹種の範囲の中で必要な性質をもつものが選択された。このことは、地理学で説かれた環境の限定の中で、いくつかの可能性のうちの1つが住民によってえらばれるという19世紀末に説かれた学説を実証するかにみえる。逆にいえば、この地域の経済生活は19世紀的段階に止まっていたということもできよう。

そのような条件下で、特に大木であることを必要とする建築用材料については、乾燥や剥皮、さらに製材・運搬等に時間がかかるため、実際の建築にとりかかる7～8年前から計画を立て、設計にもとづいて柱・梁・貫その他の材料の所要量を定め、各所の山林を歩いて目的に応ずる樹木を見定めて所有者と交渉し買い求め、適時伐採・製材・運搬等の作業を行った。これらの作業には必要に応じて専門の大工・杣・木挽なども加わったが、たとえば梁・柱などの製作には大工に墨をひいてもらうだけで、その他の木取りは大方自分もしくは親族・近隣などで能力・技術をもつ人によってなされたという。

一般民具に至っては、ほとんどすべて素人が材料の採取から完成までを行ったのであり、市場や商店で購入する商品は金属製のものを除いてほとんどないといってもよい。これは経済段階が未発達であるということだけではなく、それぞれの家庭の個々の人の条件に合せて、大小軽重の差を考慮した道具を要するということが大きく加わっていたからであろう。ほとんどの作業、労働が人間によって行われている場合には、その能率、継続時間、疲労度など個人の肉体条件に道具を適応させる必要が極めて大きいのである。

均質な材料を必要量そろえようとする場合には、それらの樹種を栽培することもあった。果実を補食とするためのクリ、樹皮・幹材を建築その他に使用し、かつ商品化する目的に供せられるスギなどがそれで、ことにスギの造林は早くからひろく経営されたのである（石川県立郷土資料館，1973；白

峰村史編集委員会1959・1961)。この点は既に多くの研究者が指摘し、白山麓各村史や植生図（文化庁、1977；石川県、1977）にも示されているところである。

調査地区の植生

樹種の概観を行うために、調査地区として選んだ手取川西谷の小原（水没移転）、東谷の桑島（水没移転）、白峰の各地区⁹⁾周辺部の植生状態を石川県が調査した植生図に従って示した。原図は5万分1地形図を着色分類したもので、本稿では地区住民が選択する樹木の概略的分布を示すのが目的であるから、必ずしも細部にこだわらず、傾向を把握するため適宜省略を行った。また、ダム化した小原地区については、原状に近づけるため若干の改変を行っている。

両者を比較して概念化すれば、東谷地区は高度も高く、それに応じてブナ林の占める割合がより広い。これに対して西谷ではコナラ・ミズナラ林がより大きい割合に達している。また、西谷では下流にケヤキの群落が存在して低い丘陵地の植生に近づくのに対して、東谷の稜線付近にはクロベ・ヒメコマツ群落が成立して山岳的森林の様相を示すのである。

なお付記すれば、本植生図の実地調査そのものは1977年よりも前に行われたが、なお民家・民具等の資料はそれより古く採取・使用されたものであるから、資料の作製はこの環境もしくは植生よりも原始的な林相において行われたとみてよい。したがって、資料の時期とほぼ対応しているとみなすことができよう。

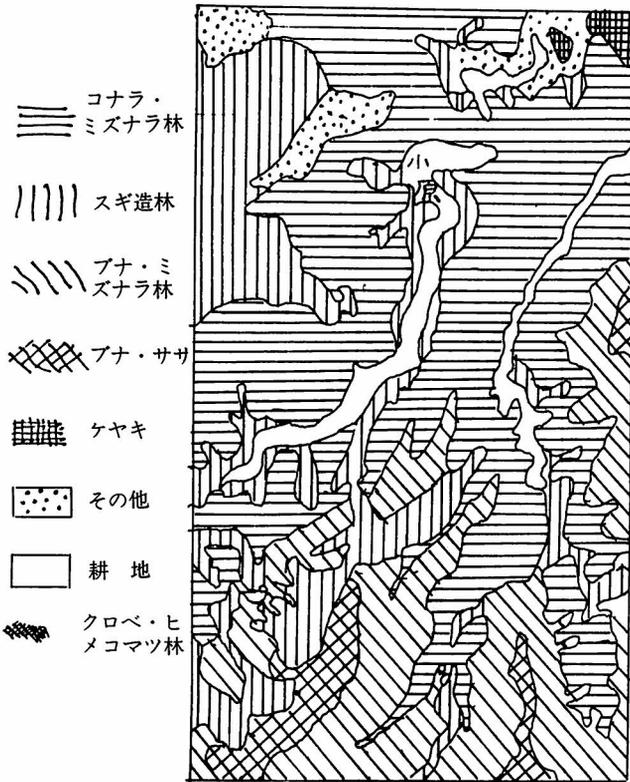


図1 大日川上流（西谷）小原附近の植生分布

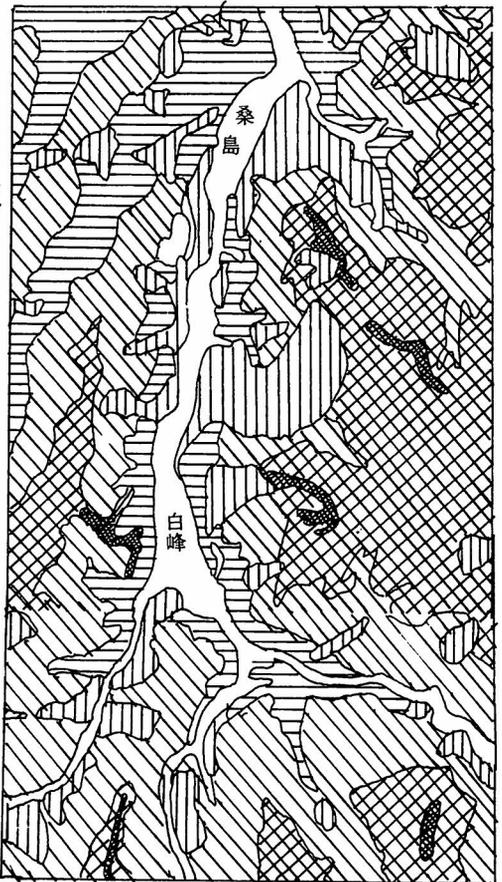


図2 手取本谷桑島・白峰地区の植生分布

ところで、この植生図のみでは、極めて概略の樹種を推定することができるだけなので、第1表に植生に含まれるおもな有用樹種を示し、ことに重要なものの用途のおもなものを記載した⁷⁾。森林の排列は上にあるものが概して高度が高いことをあらわしている。樹種としては高木・亜高木・低木までとし、庭園樹等の灌木は記さなかった⁸⁾。それらがどのような理由によって、それぞれの用途に供せられてきたかについては、次節以下において樹種ごとに記述してゆくこととする。なお、地方的呼称に止めて正確な学名を記載しないのは、素人がかえって誤を犯す場合をおそれたためである。

注

- 6)このほか手取ダムによって水没した深瀬、五味島、釜谷、鶺鴒ヶ谷などの民家・民具の一部が県立歴史博物館に収蔵されているが、その量と質とは比較的少なく、かつ東谷の状況としては桑島地区と大差ないので、植生図は省略した。
- 7)この表を作成するには、文化庁(1977)、石川県(1977)のほか、農商務省山林局(1916)に記された用途を参考とした。
- 8)民家としての樹木利用は、広義にとれば観賞用としての庭園樹、防風・防雪用の障壁樹等をも含むことになるが、今回はそこまで調査することができなかった。今後の課題である。

第1表 白山麓森林の樹種と用途

森林	主要樹種名	樹種の用途
クロベ・群ヒメコマツ	クロベ・ヒメコマツ・ヒノキ・トチノキ・サワグルミ・カツラ・イタヤカエデ・オノエヤナギ・タニウツギ・マルバマンサク・ヤマモミジ・キハダ・クサギ・ハリギリ	ヒメコマツ—建築材、カツラ—家具 トチノキ—家具、イタヤカエデ—柄・ヘジナ用 マルバマンサク—ねそ キハダ—薬 ハリギリ—家具材
アマザナサチ群落	イタヤカエデ・ブナ・ヤマウルシ・オオカメノキ・リョウブ・オオバクロモジ・マルバマンサク・エゾユズリハ	ブナ—建築材 オオバクロモジ—ねそ マルバマンサク—ねそ リョウブ—葉を食用
ブナ・群ミズナラ	スギ・ブナ・サワグルミ・シナノキ・エゾイタヤ・マルバマンサク・ホウノキ・ミネカエデ・オオバクロモジ・リョウブ・ノリウツギ・ミズナラ	スギ—建築材、サワグルミ—履物・建具材 シナノキ—細工用材 ミズナラ—建築材・樽・戸棚 ノリウツギ—柄 エゾイタヤ—家具・装飾材・ヘジナ用
コズナナラ群落	コナラ・クリ・ミズナラ・ソヨゴ・コシアブラ・ヤマボウシ	コナラ—建築材・器具材 クリ—建築材・実ハ食用 ヤマボウシ—灰にして陶器用
ケヤキ群落	ケヤキ・イタヤカエデ・アカガシ・モチノキ	ケヤキ—建築材・装飾材 イタヤカエデ—家具・器具 アカガシ—柄

民家建築に用いられる樹木

A. 西谷

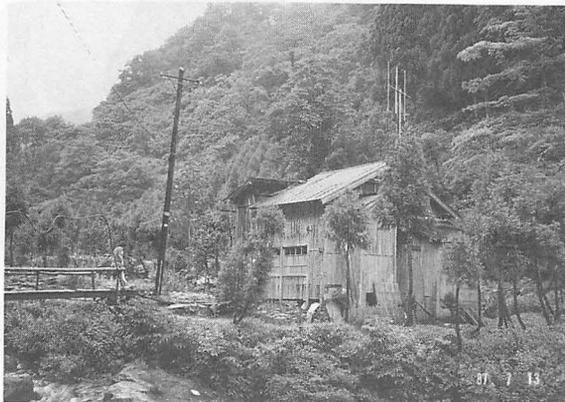
奥の方(新丸村)では柱・梁などにゴヨウマツが用いられる。棟木としてはクリが用いられ、また土台にもこれを用いる。屋根のカザシにはミズキが使われるが早く腐るので、小原では近年はクリを用いることになった。これは昔はクリが食料として重要で伐採しなかったので、ミズキだったのであ

る。小原では柱・梁には一般にスギが使用された。また、西谷全域を通じて、建具・羽目板などはスギであった。また、摩擦されることの多い炉縁・敷居などにはナシが使われる場合が多い。掘立柱のネブキ小屋では柱としてサルスベリなどを用いる。この幹が屈曲した部分を組合せてアーチ状にすると、積雪による横側圧に対して抵抗性が大きくなる。そのほかカツラも小屋材の柱用に供せられる。これらを緊縛するネソとしてはマンサク、クロモジ、フジなどが多く使用された。

B. 東谷

上流部の大道谷、苛原など出作り地区の民家では、柱・梁その他板などにブナおよびゴヨウマツが主となっている。また、スギも柱・床・羽目板として多く使用した。屋根はカヤである。やや低い土地ではスギがより多く用いられ、大黒柱にケヤキを用い、床にはクリが用いられた。仏間の材にもクリが使用されることがあった。天井その他はやはりネソとしてマンサク、クロモジが使用されることは手取谷全域を通じて同様であった。

白峰・桑島では、豪家は柱材にケヤキ、鴨居にマツ・スギ、敷居に主としてマツ、板敷の部分にもマツ・スギが使用された。梁にはケヤキ・ゴヨウマツが用いられ、場合によってブナも使用されている。仏間の材としてケヤキがかなり多く、一般の羽目板、戸、板戸はスギが多く漆が塗られている。中流以下の家屋では柱以下ほとんどが大黒柱をのぞいてスギ・マツといつてよい。天井は近年まで張らず、棟木や土台の材にも近年までは稀にクリを用いたにとどまる。ただ、敷居にはケヤキ・マツなど堅い木を用いることが心がけられた。



現存の出作り民家の1例

白峰村大道谷太田所在中山喜四松家。水が豊かで日当たりもよく、交通路にも近い。骨組みの材はブナ、板・壁材はスギを主とする。

なお、ケヤキは宮・寺の建築ならびに仏間や玄関などの装飾材として使用され、それ以外では一般民家には稀なものである。

C. 利用された樹種の特徴

◎マツ

手取谷ではアカマツ、クロマツはほとんどなく、ゴヨウマツが多い。真直な大材が得られ、耐久性がある。スギにくらべ腐敗せず、年輪も密で堅い。摩擦に耐える。

◎スギ

安価で大量に得られ、加工しやすい。真直な材が得られる。節が少く漆が塗りやすい。ただし芯が腐朽しやすく摩耗しやすい欠点があるから、敷居・炉縁・土台などに不適とされる。

◎ケヤキ

前述のように堅牢で杢目が美しいので、装飾的な部分である入口や仏間の柱・鴨居・敷居あるいは客室の板戸などとして使用する。

◎ブナ

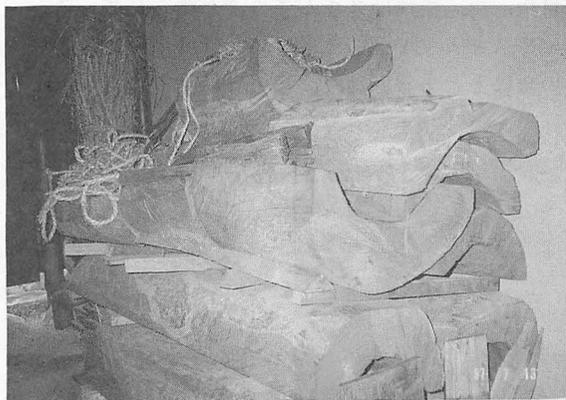
手取谷では上流部や山腹のみに生育するので、大木は上流の出作地の家屋でないと得られない。また、腐敗しやすいから土台には用いないが、比較的堅い部分が自在鍵・入口の踏板・床板などに利用される。

◎トチ

家屋建築としては床柱・装飾材などに僅かに使用される。紋様と肌がち密な点が尚ばれるにすぎない。

◎クルミ (クルビ)

これも建築材としては稀であったが、食料として重要であったのとシラタが腐りやすいからで、これを削りとった赤味の部分はコバ (屋根板) として用いる。山刀で簡単に割って作れるからである。



屋根葺材 (コバ) の原木

クリの樹幹の芯部を除き乾燥中のもの。芯部は軟く腐りやすい。



民家の屋根材料ネソ

もっとも太い材はスギ、屋根のウラ材料はカヤ、これを結ぶ太い材料はマンサクのネソ、細いものは稲藁の縄。

◎クリ

食用として重要だから古くはめったに伐採しなかったもので、一般民家では新しく建てたもの以外は稀である。豪家では土台および屋根葺材として使用され、棟木としても用いてある。それらはすべて腐敗しにくいということで説明できよう。

◎ナシ

山梨で、堅牢であるから摩耗しやすい部分に用いるが、量としては少ない。

◎サルスベリ

ここでいうのはナツツバキのことで、堅くて年輪がみえず、ねばり強いので、小屋の柱に用いるが、床柱などのほか家屋建築には量が少ないのであまり重視されていない。

◎マンサク

材を緊縛するネソとして多用される。これは階層の区別なく、ねばり強く折れにくい性質に注目しているからである。

◎クロモジ

これもネソとされるが量は前者に及ばない。

◎ミズキ

あまり利用されないのは腐りやすいからであると考え⁹⁾。

以上、民家建築材の特性として重視されるのは堅硬、耐朽、耐湿など多雪・多湿という地域条件に対抗できる性質であるようで、現在の家屋にもかなり古材を利用する場合がみられるのは、前代の建築材の耐久力が大きいことを物語るであろう。

注

9) 前掲7) による。

民具製作に用いられる樹種

A. 西谷

a. 白その他太径木を必要とする民具

これには食物調整用具が多い、白はその最たるものである。ことに脱穀用のホガチウスは直径1m以上のものが稀でない。その他キバチとしてスギ・ケヤキの大径木が用いられる。ホガチは容量が大きくないと脱穀すべき穀物の穂が入らず、また貯穀用リンゾウの台にする必要から、ネズミガエシ(図3)が必要でその分直径が大きくなってはならない。これにくらべ精白用ならびに餅搗用の白はやや小ぶりでも差し支えなかった。

b. 道具の柄、槌、棒、杖などの小径木の民具

クワ、カマ、イブリ、コスキ、ニナイボウ、キネ、ナタなどに用いる、多くは堅硬で折れ、ねじれ、ゆるみなどを生じない必要と、同じ品を数多く必要とせず、使用者個々の身長、体力などに適せしめる必要が大きかった。近隣で得られるものが多く、雑木の性質をえらんで使用者みずから作る場合が一般的であり、使いやすさがもっとも要求される。

雪除けに用いるコスキはケヤキ・クルミが多い。箱類は専らスギ、桶も同様である。大きなものとして穀類を乾燥するためのアマボシがあるが(佐々木, 1980; 千葉, 1980)、これもスギが大部分で柱の下につけて移動させる車輪とその軸のみが雑木のサルスベリ、トチ、ブナなどであった。

B. 東谷

大体は西谷に類するが、こちらの方がより高度が高いため、ゴヨウマツ・ブナなどの材が多用される傾向がある。コスキがほとんどブナであり、汁つぎ、酒つぎのチョウシとする樹木のこぶをえぐったものもトチのこぶが主となる。また、ヤマモミジ、ウリハダカエデなどを割いて籠を編む材料としてのヘジナを製するなど、竹の代用材として雑木を利用する場合もこの方面に多い。

樹皮利用の民具としてはケヤキが多く、これの樹皮を円形にはいで子供をいれておくイツメとし、また粟穂を摘むガンギともする。そのほか雑穀を臼からすくいあげるシャクリバチの周り、さらにリンゾウの周囲を包むには主としてスギ皮が使用された。同じく樹皮利用でも薬用にはキハダの胃腸薬、ネムノキの洗剤などがあり、コナラは染料、シナノキの縄・蓑も重要であった。シナノキは半分(片側)だけを剥ぐので枯れることはない。クロモジもネソヤかんじきの縁にするほか樹皮と根とを煎じて、さしこみのあるとき薬として用いる。

ヒノキは少ないが、東谷では深瀬で笠を編むほか曲物として容器とする。綴じ合せるにはやはりヤマザクラの樹皮が用いられる。樹皮ではないが、ヤマボウシ(西谷でイツツキ)の材を焼き、この灰を陶器の釉薬に使用した。その実は食用となり、材は槌や柄、くさびなどにも用いられた。

チシャ(エゴノキ?)の花は石鹼の代りになり、材は重いハンマー、かけやなどの柄に適する。木炭としても良好な材であるが薪炭用材には種類が多いので、一々名をあげることは省略する。

C. 利用された樹種の特徴

◎スギ

軽く直い点ですぐれ、棒に用い、鎌の柄、横槌の柄、箱類（物入れ、書類函、机、仏壇、こたつやぐら、あまぼし、神仏用具など）のほか棚、置板、麵棒などにひろく用いる。

◎マツ

ゴヨウマツを主としてヒキワリウスの歯にする。堅くて当りがやわらかく穀物が碎けないので賞用される。

◎ブナ

東谷でコスキの大半はこの樹種で、ソリの台もまたブナが用いられる。肌がこまかく雪が付着せず、水分を吸収して重くなることがないので、この種の道具として賞用される。西谷にはこの樹種が少ない。杵の頭にも用いる。杓子なども。

◎ケヤキ

白の用材として大径木が得られ、重量があることが理由である。樹皮堅く容器となる。

◎ナラ

鋤、鋏の柄に用いる。稀にコスキ。

◎クルミ

西谷で主にコスキ、ソりに用いられる。ブナ代用で軽く粘性が大きい点で雪が付着して重くなることがない。杵の頭にもする。

◎ハンサ（ミズメ）

堅硬かつ重く、白ことにホガチウスとしてもっとも喜ばれる。また、敷居のような摩擦に耐える性質から家具、道具の柄などにも用い、クサビとしても良い。屋根茅を葺くとき縄を通して縫いつけるハリとして枝が利用される。これも堅いからである。

◎トチ

白として用いるのは大径木があり、重いことが理由である。家具の装飾材、肌のこぶは銚子、盆などに用い、実はさらしてトチモチとし、食用に供する。肌文が美しく硬い。

◎カエデ・モミジ（ハンノキ・イタヤと呼ぶ）

割いて薄片材とし籠類を編む。粘り強く腐朽しがたい上に木肌が密で美しいことから、竹の代用として賞用される。この薄片材がヘジナで梅雨明けの季節に採ったものが割きやすく、これを乾燥保存し所要時に水に漬ければ容易に細工しうる。

◎キハダ

1町歩に1本もないといわれるほど稀であるが、樹皮は胃腸病に効が大きいので民家の常備薬とされた。材は堅く道具の柄となる。

◎シナノキ

樹皮が繊維とされるほか、材を柄とする。折れにくい。

◎クロモジ

雪の降り積ったとき歩行するカンジキの縁木としてもっとも利用される。堅くかつ粘りがあって容易に折れない性質がある。樹皮を薬用とする。

◎シャクナゲ

ネソ、曲った穴を掘るシャクリバイ（棒）の柄とする。ねばりあり。

◎ヒノキ

香があり、柁が美しく粘りがあるので箱材・曲物・編笠の材料となるほか、死者の棺材とする。量

は少ない。

◎ネマガリタケ

直く伸してアマに編む。根は堅いのでガンギとしても用いる。箸を作るにも用いた。

◎サルスベリ（ナツツバキ）

堅硬で重いから槌の頭部として賞用する。

◎クリ

前述の通り、実を食用とするのであまり伐らなかったが、堅いので焼畑に火入れをするイブリの先として用いた。この柄にはジョウブ（リョウブ）の生幹が水気が多いのでよく用いられた。

◎ハウノキ

比較的少い。西谷でコスキとする。軽く滑らかな木肌で雪が付着しがたい。

◎ミズキ

掛鍵として用いる。

生育している樹木の利用

民家・民具の材として利用する場合には、ほとんど伐採して枯死させ樹木を利用することとなる。これを生育させたまま、枝、樹皮・樹実などを生活のために用いる場合をここに述べる。地域差はない。

A. 樹実を利用するもの

◎トチノキ

実を拾い乾かしてアクをぬき、粉碎して水晒しとし、苦味がなくなったものをアワまたはモチゴメと混ぜて炊く。トチ1升到アワまたはコメ5合の割合で炊く。また、トチガユを作ることもある。

◎オニグルミ

殻をとって生食する。また、あえもの、つくだに、くるみ味噌などにもする。乾燥して保存する。

◎クリ

皮をむき食用とする。ゆでた後、干して保存する。

◎チャボガヤ

カヤの樹実で食用とする。主として報恩講の膳に供する。ピーナツのような味である。

◎マタタビ

蔓性。実を生で食べる。

B. 樹皮を利用するもの

◎キハダ

薬用。染料。

◎シナノキ

皮を縄とし、草履を作る。

◎アカバレ（アカメガシワ?）

染料。

C. 枝を利用するもの。

◎カエデ

蚕のまぶしとする。ことに若い分岐の多い枝がよい。

◎スギ

9～10月に伐った青葉のついた枝をナビヤ（ネブキ小屋）の床に敷くと防虫効果がある。

◎ゴヨウマツ

冬の花がない期間に仏様に供える。12月の8日と28日にはフクラシバ（ソヨゴ）をこれに加える。これは山で多量に伐取って来て家の入口の雪の中に貯えておく。

◎ネマガリダケ

毎日の箸とする。しかし、これのみを箸にするときまっているわけではなく、自家の付近の不特定の枝を用いることもある。

若干の考察

白山麓における住民の植物利用は以上に尽きるものではない。樹木のみについても観賞用、信仰用、および商品用（たとえばクワ→蚕）などがあげられるが、それらにはふれなかった。さらに草木ならびに菌類が多数にある。しかしながら、それらはすべて前述のように今後の課題に属する。

樹木利用のみに限定してみても、白山麓住民の生活の大半は植物に支持されて成り立っていたといえるのであって、その最大のものはナラ森林からブナ森林にわたる雑木を利用して成立した、ムツシとナギハタを利用する農・林混用経営という土地利用経済である。したがって、もし、すべての自然を完全に保護したとすれば、この地域の住民は消滅せざるを得まい。かように、植物に依存する経済が曲りなりにも約半世紀前まで継続しえたのは、土地・植生の周期的利用と、生物の一部をとりつくさずに再生に必要なだけを残しておく、という方式（というより自然と共存するための心がけ）によると考えられる（朝日新聞金沢支局，1986）。この場合の農としてのナギハタのみでは自給生活としての食物供給も充分ではなく、他地にその欠除分を求めざるを得なかったが（千葉・三枝，1983）、樹木利用については必ずしも不足してはいなかったと認められる。桑島・白峰などの堂々たる民家や民具の残存は、その表現であるといっても過言ではあるまい。

ことに自家労力と集落住民の援助によって専門家に任せず組立てたそれらの耐久性と、木材使用法の合理性とは、50～100年以上の雪中生活にあって、なお使用上ほとんど差支えない現状を保っているのである。この点は白山ろく民俗資料館に展示されている民家群を一見すれば明らかであろう。

これらの合理的民俗知識は、石川県立歴史博物館や加賀市立歴史民俗資料館に収蔵されている民具の材料と用途（使用目的）とのかかわりを観察することによって瞭然とする。たとえば臼には3種の形式と材料のちがいがあある。ホガチウスは特に加賀型と大きく異なるネズミガエシが付けられ、また重量ある大径木としてハンサ・ブナトチなどが使用される。内側は、脱穀時に実が飛散しない工夫として口の周囲より狭い藁製のウスブタをかけるようになっている。

これに対して精白用の臼や餅搗用の臼はネズミガエシがなく、やや軽く運搬しやすいケヤキ材が主となる。両

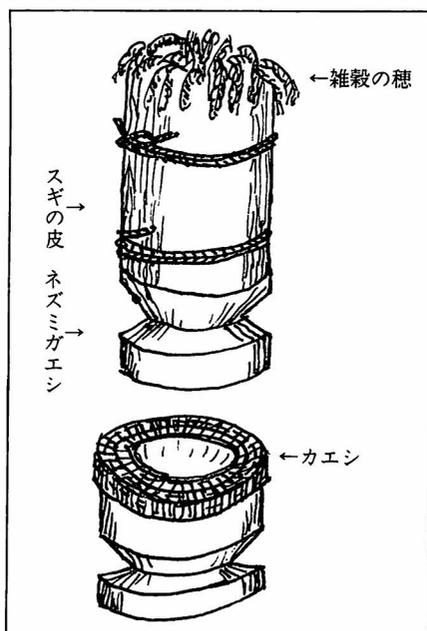


図3 リンゾウの形式

者の違いは精白用のそれが穀粒の相互摩擦を大きくし、かつ穀粒が飛散しないため口径を狭く内径を広く穿ったカエシをつけてあること、餅搗き臼は飛散しないのと杵を全面的に平均させて搗くように、口を広く底面を浅くしてあるなど調製上の配慮が施されていることがわかる。

しかしながら、問題点はこれら民具・民家そのものの文化的価値にあるのではなく、これらの価値を創造した住民らが単なる人口としてはともかく、知識と技術とにおいてそれらの文化を継承してきた人々が、今や高齢となって近い将来に消滅する運命にあるという事実である。いま、これらの人々がまだ健康でそれらの民家や民具を現実に製作し、また使用しうるうちに、後来の若い住民がそれらの用法や特性、維持・再製の技術と知識とを学習しうる方法・記録を整備しなければなるまい。もし、これが実行されないと民具は単なるがらくたの集積に化して、無意味な物体となる。とうてい文化財とはいえない品物に化するにちがいない。何の用に供したのか、どのような方法で使用するのかわからぬ道具が、何で昔の文化を語る貴重な遺品と呼ぶことができるのか、われわれには理解できないのである。今後の課題の最大のもの、これらいわゆる「民俗知識」を全体として継承維持してゆく方法を企画しかつ実行することではなかろうか。

本報告は昭和61年度白山自然保護調査研究会の研究費に依ることを記し、謝意を表する。

文 献

- 朝日新聞金沢支局（1986）常次郎氏の春夏秋冬。
文化庁（1977）天然記念物緊急調査植生図・主要動植物地図第17石川県。
千葉徳爾・三枝幸裕（1983）中部日本白山麓住民の季節的放浪慣行——牛首地区の事例を中心に——国立民族学博物館研究報告8巻2号。
石川県（1977）石川県の自然環境第2分冊 植生。
石川県立郷土資料館（1973）白山麓民俗資料緊急調査報告書。
農商務省山林局編（1916）日本樹木方言集。
尾口村史編集委員会（1981）石川県尾口村史第3巻。
佐々木高明（1980）アマボシ考——白山麓のヒエ穂の乾燥法——千葉徳爾編：日本民俗風土論所収。
白峰村史編集委員会（1959）白峰村史下巻。
白峰村史編集委員会（1961）白峰村史上巻。
水津一郎（1970）石の文化と木の文化。

Summary

From the last day of the Tokugawa Government to the Taisho age, in the base area of Hakusan, dwellers used many kind of trees to make houses and tools, and for wear and foods in their daily life. They used some special kind of trees noticed on their natural characters. For example, when making houses they used pine, cedar and Japanese beech, as these trees have snow resistant properties. They made wood tools for daily-use, choosing suitable trees. During that time, dwellers had special knowledge about tree's natural characters.

Authors got some examples on utilization of natural trees from materials in museums. And they also got many valuable examples from one dweller who lived at that time in the Hakusan area and made many "folk" tools to use in his daily life.

We should pay much attention to utilization of trees in the Hakusan area. To conserve these reasonable usages of trees means to retain the "culture" of the area.